PASSIVENESS……

磨きあげられた石の上に、ひざまずく。白い石に、自分の姿が映り込む。いつも、誇りを持って、気分高らかにここに片膝をつくはずが、今回は違っていた。大きな不安と、憎しみと、そして虚しさが、今の自分にはあった。

この傷一つない、白い石の上で、自分は何回胸を踊らせたことだろうか……。自分の戦績を広め、胸高まる戦いを、英雄談を、いつまでもいつまでも話し続けられる、そんな空間だったのに……。自分の前には、そんな自分の自慢話を笑いながら聞いてくれる方がおられたのに……。

今、自分の前には、憎むべき者しかいない。しかもそいつは、ニヤニヤ笑って、そいつの足元でひざまずいている自分を、見下している。

悔しい。今すぐにでも、コイツの首を切り落としてやりたい。

が、グッとこらえる。

「ルシディリア星系でのお手柄、お見事であった……。」

上の方から、重い声が聞こえてきた。いつも聞く誉め言葉とは違う声だ。あの方の声ではない。

「しいては、前々からのお前の望み、かなえてやろう。」

やめてくれ。貴様が立つべき場所は、そこじゃねー。

声が聞こえるたびに、怒りが増すのが解る。

「は、有り難き幸せ……。」

心にもないことを……。

悔しさに唇を噛んでいるのを余所に、手を叩く音が聞こえた。

「顔を上げて良いぞ。山茶統合参謀司令総長殿。」

聞きたくない声が、耳に入ってくる。

がしかし、顔を上げた。そして、ゆっくりと後ろ振り返る。

顔の筋肉が、一瞬だが、少し緩んだのが解る。

「褒美だ。受け取り給え。」

自分の後ろから、聞きたくない声がまた入ってきた。

「あ、ありがとうございます……。」

下げたくない頭を、地面に顔がつくほど下げる。

「うむ。」

相手が返事をするまで、頭は上げてはいけない。こんなヤツのために、俺は何で頭を下げにゃならんのだ。

憤りは増すばかりだった。

顔を上げ、立ち上がった彼女は、一礼をすると、褒美を受け取りに後ずさりして下がった。

彼女の前には、二人の兵士に連れられた一人の女がいた。桃色の長い髪をした、色白のひ弱そうな女だ。白無地の囚人服を着せられ、腕には奴隷の焼き印がされていた。番号は、〇〇〇〇。極刑に処せられる者しかつけられることはない番号だ。この国家では、初めての〇〇〇〇番。

そして、手足には鎖、首には黒い金属の首輪、その首輪からは太い、鈍い光を放った鎖が兵士の手の中へと延びていた。

囚人の女は、自分の前にいる人物から目を外らし、そっと〇〇〇〇という数字をかくした。か細い腕はかすかに震えており、その白い肌には、無数のアザと切り傷があった。

しかし、この囚人の表情を読みとることはできなかった。なぜなら、彼女の桃色の前髪は、顔の半分以上を隠しているからだった。

兵士から、鎖を受け取ると、山茶統合参謀司令総長は、振り返り敬礼した。

彼女の視線の先には、バルダーク帝国第二代皇帝カーティスが、座っていた。薄笑いを浮かべ、山茶を見つめている。彼の目は、山茶の心の中までも見えているようだった。

長い沈黙のあと、山茶は右手を下ろし、この間から出て行こうとした。そこで、声がかかる。

「司令総長。君のその肩書きは、今日で終わりだ。君の座は、弟に継がせることにしたよ。なに、本来君は国賊だ。そこの女のようにならなかっただけでも、有り難く思い給え。」

背を向けたまま、しばらくじっとしていたが、山茶はグッと拳を握ると、出て行った。

自分のことをあざ笑う声が、遥か後方から、エコー付きで、響いてきていた。

何も考えるな。何も思うな。とりあえず、不幸中の幸いを導き出せたんだからな……。

山茶は、何度もそう言い聞かせながら、歩いた。

□*Valldark*（バルダーク）帝国首都惑星*Aermerum*（アーメルン）・・

帝国皇帝官邸、庭園通り

検問をすまし、ゆっくりと車道にでる。

アクセルを、少しずつ開け、あたりに他の車がいない事を確認すると、車体を国道へ入れた。

午後一一時三〇分。官邸の付近に人は少なかった。このあたりは、首都のド真ん中だというのに、人の少ない事で有名だ。

車は、このだだっ広い道路を北に向かって走っていた。官邸からは、南北に伸びる四車線の広い道路があるだけだ。国会議事堂や、議会本部などの立法，行政，司法関係の建物は、北にあり、そのあたりからビル郡が広がっている。

車内は、抑え気味のボリュームで、ジャズが流れている。前から後ろに流れる、浮遊照明がフロント・ガラスを映し込み、後ろへ消えて行く。等間隔で配列されたこの照明は、リズムよく現れては、上を通り後ろへスクロールしていく。

運転するは、軍服を来たままの山茶。そして、その隣には白い布を羽織って、膝をかかえてボーッとしている桃色の髪の毛の娘。初代帝国皇帝である。が、その容姿は著しく異なっていた。一八〇cm以上あった身長は縮み、今では一六〇cm近くになっている。また、肉付きのよかった身体は、すっかり痩せ、細い腕が、白い布からはみ出している。その白くか細い腕には、〇〇〇〇番の焼き印。彼女の面影は、もはやその長い桃色の髪だけだ。

車は、二人を乗せ静かに都市の光の方へ走って行った……。

□ホテルＶｉｅｗ

安ホテルだか、ラブ・ホテルだか解らないうさんくさいホテルに、二人は宿をとった。都市の外れも外れ、首都セントラル・エリアから三〇〇〇kmも離れた場所だ。あまり、身元が割れないように、二人はこの安ホテルに入ったのだ。

しかし、山茶の身元を隠すことはできなかった。この戦乱時、しょっちゅうニュースなどでテレビに出ているので、この首都惑星ならば、誰だって顔は知っている。しかも、一九〇㎝という巨体なので、遠くからでも一発だった。

「なにかヤバい事でもしでかすのかい？」

ホテルのフロントで、キーを受け取るとき、フロントの男は、そう言った。

「そのあとだよ。」

山茶は、無愛想にそうとだけ応えると、ひったくるように鍵を受け取る。男は、少し驚いて目を見開いたが、首をかしげて、二人を見送った。

□ホテルＶｉｅｗ・・四四五

地上五階。ボロビルに囲まれた、このホテルにふさわしい、小汚い部屋。太陽光線の当たる事のない、窓。湿気た空気。嫌な雰囲気だ。屋上まで言っても、見晴らしなんか良くない。何故、Ｖｉｅｗなどと言うふざけた名前がついているのか、不可解だ。

山茶は、窓枠に腰をかけると、タバコに火をつけた。

じめじめした空気の中に、白い煙が霧散していく。

「大丈夫か？　一言も話さないが、ひょっとして……。」

タバコの煙から、ベッドの上に座っている娘に視線を移して山茶は話し出す。

「大丈夫よ……。ただ、あなたにこうして会わせる顔がなかったから……。」

何処に視線を合わせているのか解らないが、彼女はそう語った。ボソボソとした、元気のない声だ。しかしその声は、変わっていなかった。昔のままの、ちょっとしゃがれ気味の、なつかしい響きを持った声だ。

山茶は、ホッと一安心して、タバコを窓の外へ投げ捨てた。

そして、娘のとなりに座ってそっと肩を抱いた。

「こんなに縮んじまって……でも、性格は変わってなさそうだな。相変わらず、自分勝手な言葉を吐きやがる。」

いつもと違う感覚の、抱き心地。ちょっとでも力を加えたら、砕けてしまいそうだ。

「ご、ごめんなさい……。」

小さく、娘はそう応えた。

「おやおや、随分と素直だな。何年ぶりかな、お前からごめんなさいなんて言葉が聞けたのは……。とは言え、今回ばっかりは、謝っただけじゃすまないぜ、ヴァルア。」

そう言って、彼女を自分の胸元から外し、彼女の肩をグッとつかんだ。そして、彼女の顔を見つめる。

「俺たちは、たくさんのものを失い、『目的』から離れた。半ば諦めてるよ。」

そして、フッと視線を外し、窓の外を見る。

「この国は滅びるぞ。カーティスなんかにこの国を治められるわけがねぇ。また一からやり直すのか？」

山茶は、溜息混じりにそうつぶやいた。

少女は、外を眺める山茶を少し見上げると、山茶の膝に頭を乗せる。山茶のぬくもりが、耳から伝わってくるのが解る。考えてみると、二人が出会ったのは、一〇〇年ぶりだった。一〇〇年くらい、いつもならば、何気なく過ぎて行くのだが、今回は違って

いた。二人にとって、長く感じた一〇〇年だ。
「私は、三〇年かけて彼に、この国の事を教えたわ。この国を治める方法と一緒にね。彼に、『ひらめき』という形で、知識を提供し続けた。そして、もしこの国を人間が治める事ができれば、『目的』もやりやすいと思ったのよ。」
少女は、小さくそう答える。
「理想だな。それに、その知識のおかげで、ヤツはお前を殺そうとした。クーデターという形をとってな。」
山茶は、やはり溜息混じりにつぶやく。まるで少女の話を呆れているかのように、あざ笑っているかのように。
「別に、交替の方法はどうでもよかったのよ。私が任命しようと、彼が私から権力を奪い取ろうと……。一〇〇年も、彼の所有物にされるとは思ってもなかったけれど。」
少女は、淡々と語っていたが、最後の所でグッと山茶の服をつかんだ。そして、顔をうずめる。
「さっさと死に真似でもすればよかったじゃねぇか。」
あいも変わらず、自分自身に対しては要領の悪いヤツだな。
山茶は、心の中でも言葉を続ける。
「私は、死ぬ事ができないのよ。しかも彼は、私の身体を再生しようとした……。」
少女は、ボソボソと起伏のない口調で答える。
「んで、目が冷めたらヤツの寝室だったんだろ？　どうでもいいけど、その性格やめようぜ。いちばんエネルギー使うだろ、地の性格ってのは。」
山茶は、どんな状況にいても一向に表情の変わらないこの少女に、少し憤りを感じた。まったく、余裕があるのか、開き直ったのか、今自分達がどういう状況に置かれてしまったのか、理解しているのだろうかと疑問に思う。
「今はダメだ。私の記憶は、すでに半分以上失われている。ここで人格の再編成を行えば、私の封印が解かれるまで二度と記憶が戻る事はない。」
うずめた顔を左右に降って、少女はそう答える。微妙だが、彼女の声は震えていた。だが、相変わらずの起伏のない口調だ。山茶は、ヤレヤレといった感じで顔をしかめる。こんなチビスケが、あんな口調で喋られたんじゃ、違和感がありすぎるのだ。
「でも、疲れただろ？」
最早、何もかも諦めて、山茶はそういった。
「解っている。明日の朝には、もう今の私は消えているわ。この身体にあった人格形成を行っているでしょうね。」
少女は、顔を起こし山茶と向かい合った。
「最後に聞かせろ。俺たちハーレムは、お前のやる事に従うしかない。今回のは、お前の思惑通りなのか？　成功なのか？」
山茶も、少女の顔を見つめ、その前髪の向こうにある（と思われる）目をのぞき込むようにして、そういった。
「思惑通りだ。私たちは、一〇〇万年は様子を見る。」
少女の、芯の通ったしっかりとした答えが返ってきた。
山茶は、ホッとした。どうやら、少女はしっかりと事の全てを理解しているようだ。自分が、いちいち不安になる必要はない。あとは、コイツに任せればいい。今までも、そうしてきたのだから。
「じゃ、先の事は考えなくていいんだな？」
胸をなで下ろし、少しうつむいて山茶は訊ねた。

「もちろん。ただ、犠牲が多すぎたけれど……。」
少し、元気なく少女は答える。
「そうだな、犠牲が多すぎたな。ハーレムで残っているのは、俺だけだしな……。」
自分の前でチョコンと座っている少女を見つめ、山茶はそうつぶやいた。そうだ、生き残っているのは、自分だけだ。あとは、どうなったのか解らない。それとも、何処かで生きているのだろうか？
「すまない。でも、彼女達は無事よ。心配しないで。」
顔を上げ、少女は笑ってみせた。
心配しないで。
これが、今までのヴァルアだったら、心配しなかっただろう。しかし、今目の前にいるこの小さな女の子から、そんな言葉がでたところで、何処まで信じられるというのだ。縦令、同一人物だと解っていても……。
山茶はそう思ったが、ふと少女の笑いが見覚えのあるモノである事に気づいた。一〇〇年前までよく見せられた、ヴァルアの薄笑いに、この少女の笑みは似ていたのだ。彼女が、こういう薄笑みをする時は、彼女が自信に満ちた時である事を、山茶は知っていた。
無性に、なつかしい気持ちがこみ上げてくる。
ああ、あのときに戻りたい。
一瞬そう思ったが、いやこれも自分のやるべき事の一つなのだと思い、心配するのをやめる事にした。
「解った。お前を信じるよ。」
そういって、少女の頬にそっとキスをした。
少女の顔が、カーッと赤くなる。
可愛いヤツ。
山茶は、クスッと笑って立ち上がろうとしたその時、彼女の右肩口がクンッと引っ張られた。山茶は、自分の右肩に視線を移し、それからずっと右腕まで移動させる。
山茶の視線が、右手までくると、彼女は一瞬ほうけてしまった。彼女の袖を、少女が握ったまま放さないのだ。
「なんだよ？」
山茶は、おもむろに訊ねる。
でも、少女はギュッと袖を握ったまま何も話さない。
山茶は、もう一度ベッドに座りなおした。少女が、それを要求しているのだと思ったからだ。それに、彼女を袖にぶら下げたまま立ち上がるわけにもいかない。
山茶がベッドに座り込むのと、少女が山茶の胸元に抱きつくのは、ほぼ同時だった。
山茶の胸に、顔を埋めたまま、少女はじっとしている。
「オイ、何なんだよ。」
山茶は、コツンと少女の頭を小突いた。
でも、向こうは何の反応も示さない。
しようがないので、少女の肩をつかんで、少女を無理矢理自分の胸から引きはがした。
うつむいている少女。
ふと、山茶の手に熱い滴がたれた。
山茶が、少女の顔をのぞき込むと、彼女の頬は濡れていた。
「泣いてんのか？　おまえらしくもない……。」
山茶は、むしろ唖然となって、そんな言葉をもらしていた。

「……って、だって、ずっと独りで……。山茶に会えたとき、どんなに嬉しかっ……。これからだって、どうなるか解らなくて……怖くて、怖くて……。」

やっとの事で、口を開いたかと思うと、涙声で少女はそういって、グスグスと泣き続けている。山茶の右袖は、まだ握られたままだった。

ヴァルアが泣くのは珍しい事を、山茶は充分に承知していた。今まで、山茶の前でヴァルアが涙を見せたのは、一度だけだ。彼女は、泣くところを見られるのを恥ずかしがるし、何といってもちょっとやそっとで涙腺が緩むような精神構造はしていないのだ。せいぜい、アクビをするときぐらいだろうか？

今のヴァルアは、身体から、かなりのエネルギーが流出して、己の身体を維持していくのも大変な状態だから、精神的にも弱っているのだろう。しかし、声に出して泣いてしまうとは……。

山茶は、驚くしかなかったが、そんなヴァルアが妙に可愛く思えてしまった。

ギュッと、少女を抱きしめる。

フルフルと、自分の腕の中で震え、泣き続けるこの少女を、非常にいとおしく思う。いつものヴァルアも、ここまで素直だったらいいのになどと、思ってしまう。

山茶は、少女の顎に手をかけ、少女の顔を上に向かせると、そっとその濡れた唇に口づけをしてやった。

少女の震えが、一瞬、ピタリと止む。

「俺だって、恐いよ。いちばん信頼できるヤツが、俺の目の前でビービー泣いてやがるんだ。」

少し、いじめる。

少女は、再び泣き出してしまった。

「泣くな。泣くな。お前が選んだ道だろうが。」

少女は、静かに頷く。

「お前の進む道は、俺もいかなければならない。そうだろ？」

少女は、静かに頷く。

「そして、他の娘達も……。」

少女は、静かに頷く。

「お前独りだけじゃないじゃないか。」

少女は、静かに頷く。

まったく、小学生か、コイツは。

そこで、はたと山茶は気づく。

もう、人格の再編成が始まっているのだ。少女の中に眠る、無数の人格の中で、現状にあったものが選ばれ、身体と精神を再構成する。必要な記憶と、要らない記憶とをより分ける。要らない記憶は、少女の頭の、奥深くに封じられてしまうのだ。

『俺の事も、忘れちまうのか？』

山茶は、自分の前でまだグスグスいっている少女を見つめ、そう思った。

「なあ、ヴァルア、今の俺はお前の何だ？」

山茶は、無意識にそんな事を聞いていた。

「私の……、奴隷……。」

ハアッ。山茶は、大きく溜息をついた。こんな半ベソかいているガキに、そんな台詞がでてくるとは、まったく。テメーなんか、さっさと再構成しちまえ！

ヴァルアなんか、大嫌いだ。

山茶は、まだつかまれていた自分の袖を振りほどき、ぷいと外

方を向いた。
「クスクスクス。今は、違うかもな。」
不意に、山茶の後ろから、しゃがれた声。
ハッと振り返った山茶の視界には、薄笑みの少女。
さっきまで泣いていた事など、みじんにも見せぬ。
「ふん。俺は、お前から逃げる気はないぜ。」
山茶は、そういって、再び外方を向いてつよがって見せる。
「当たり前だ。」
少女は、ニッコリ笑う。
それだけ、俺は信用されてるってことか……。
山茶は、少し呆れるとヤレヤレとベッドから立ち上がった。
少女が、山茶を見上げる。
「風呂にでも入ろうぜ。そのあと、ちょっといいだろ？　不安をまぎらわすためにもよ……。」
山茶は、自分の足元でチョコンと座っている少女を見おろすと、苦笑混じりにそういった。
今度は呆れるのは、少女の番だった。
しかし、少女は、コクンと頷くと立ち上がる。
「サンキュ。」
山茶はそういうと、旅行カバンから着替えを出すために、ベッドから降りた。

＊　＊　＊

火照った身体は、ピンク色に染まり、ほのかに湯気を上げていた。そのピンクの肌は、少し汗をかいている。
白いシーツのベッドの上で、一人の女と一人の少女が重なる。
少し息が荒い。
風呂上がりの、二人。
フロアには、二枚のバスタオルが、投げてある。
着替えは、椅子にかけたままだ。
そして、ライトの明かりは抑えられ、ベッドの上で動き続ける二人を、淡く照らすだけである。

□ホテルＶｉｅｗ――四四五

朝起きたときに唖然としたのは、山茶である。
「あーあ、さらにチビになりやがった。」
頭をボリボリかきながら、上半身を起こした山茶は、そうつぶやいた。自分のとなりに寝ていたのは、一五〇㎝足らずの小さな女の子だった。
「一〇㎝以上縮みやがった。しかも、毛まで抜けてやがる。」
おそらく、その身体にあわせた髪の毛の長さになるのだろう。
少女が寝ている周りには、桃色の毛が散乱している。よくみると、少女や、山茶自身の身体にも毛がたくさん付着していた。
「まったく、風呂入りなおさにゃ……。」
まだ、静かに寝息をたてている少女を刺激しないように、再び布団をもとに戻すと、山茶はベッドから降りた。
ザザ――――――……
軽くシャワーで、身体を流す。
桃色の髪の毛が、排水口の方へ流されていく。
ヴァルアの、色あせた桃色の髪の毛。

ヴァルアの切れた状態の髪の毛を、山茶は初めて見る。
ヴァルアの髪一本にも、膨大なエネルギーがあるのだ。そう簡単に抜けもしないし、もし抜けてしまったら、星一つ破壊しかねないほどのエネルギーが放出される事になる。
「この俺にも、滅多に触らせてくれなかった、ヴァルアの髪が……。アイツは、本当に封印されちまったんだ……。」
山茶は、ふとつぶやくと、今、自分達の置かれている状況を再認識せざるを得なかった。ヴァルアには、今もう何の力もない。アイツは今、俺しか頼れるものはない。
これから、一〇〇万年も、どうやって生きていけばいいんだろうか？
山茶は、頭をかきあげながら、そう思った。

＊　＊　＊

山茶がシャワーを止め、寝室に入ってきたときには、すでに少女は目を覚ましていた。
チョコンと、ベッドの上に座っている。
彼女が、着ているパジャマは、ヴァルアのものだから、ブカブカだ。左肩がむき出しているし、胸が半分見えている。
「おはよう。」
山茶は、声をかけた。
少女は、状況を理解していないようだ。
何故、自分がここにいるのか、いや、それ以前に自分は誰なのか……？　そして、自分に話しかけた、自分の前にいるこの女性は誰なのか。
「あなたは？」
山茶には、聞いた事のない声が返ってくる。
どうやら、再構成は完了してしまったようだ。
自分の前にいる少女は、自分の事をまったく知らない。
予想していた事、解っていた事ではあったが、やはり苦しかった。これから一〇〇万年間は、少女の記憶が戻る事はない。
脱力感が、山茶を襲う。
しかし、ここで全てを投げ出してしまってはいけない。
この少女は、自分を必要としているのだから。
「俺か？　誰だと思う？」
山茶は、気を取り直して、部屋の中へ入ると、腰をかがめ少女を見つめた。
少女は、しばらく首をかしげる、頭の中で考え、該当する単語を捜した。そして、不意に浮かんできたのか、コクと頷くと山茶を指さす。
「おかーさん。」
そして、一言そういった。
山茶が、ギョッとする。
「残念。俺は、お前の母親じゃねーんだなこれが……。」
山茶は、顔を真っ赤にしながらも、そう答えた。
おかーさんなんて言葉を聞いたのは、何年ぶりなんだ？　それに、こんな女の子からおかーさんなんて……照れる。でも、全然悪い気がしないのは何故だろう……。
「じゃ、おねーさん。」
山茶を指さしたまま、次の言葉が飛び出す。
「違う。」

山茶は、首を横に振る。
「オバサン。」
ムカッ。
「絶対違う！！」
強く否定する。
「？？？　わかんない。」
該当する言葉がなくなったのだろうか？　腕を下ろすと、少女はまた首をかしげる。
「解らなくていい。俺も解らないから。だが、俺とお前は一緒にいる。これからもずっとだ。ずっと一緒にいれば、俺が誰だか解るし、お前が誰だかも解る。」
山茶は、少女のとなりに座ると、笑ってそういった。
少女も、ニッコリ笑う。
「うん、一緒にいる。」
そういって、ギュッと山茶の手を握る。
「よし、それじゃあシャワーを浴びてこい。毛まみれだ。」
山茶は、立ち上がって、少女をベッドから下ろすと、シーツの毛をはらった。
「はい。」
元気よく、シャワーのある場所へ少女が駆けていく。
はらはらと落ちる桃色の髪の毛を見ながら、山茶は少し寂しい気持ちに襲われた。
そういえば、あの少女には、長い前髪がなかった。大きな二つの可愛い瞳が自分の事を見つめていた。もう、あの娘は顔を隠す必要はなくなったのだ。
ヴァルア本心は、あの娘の何処かで眠っている事だろう。自分が出てくるべき日まで。
「ひょっとして、あのまま成長しないんじゃないだろうな……。その事を聞くのを忘れた！」
山茶は、一つ溜息をつくと、シーツをたたんだ。
掃除機で、散らばった毛を吸い取る。
ヴァルアのとった道は、正しかったのだろうか？
一〇〇万年以上も、この国が保つのだろうか？
ヴァルアは、どういう気でいたのだろう。
カーティスは、どういう気でいるのだろう。
そして、俺は、どういう気でいればいいのだろうか？
あの娘には、何を教えて、何を教えてはならないのだろうか？
いろいろと想いを巡らしながら、山茶は着替えを済ませた。
ボーッと外を見つめる。
世界は広い。
一〇〇万年もあれば、全ての星をまわれるかも知れない。
そんな事も考えた。
ま、深い心配はしなくていいだろう。ヴァルアの事だ、どうせあの娘もかなりの切れ者なんだろう。足手まといにはなるまい。ヴァルアの再構成が、そんな馬鹿になるとは思えないしな。
山茶は、一人でとりあえず納得すると、椅子から立ち上がり、旅立ちの支度をした。
とりあえずは、あてもない旅を続ける事になろう。なに、金はいくらでもある。ヴァルアの皇帝時代の金、自分の今まで稼いだ金。この帝国が存続する限り、この金は効力を発するのだ。
ひょっとしたら、カーティスという男はこうなる事を見越して、俺たちの財産にはいっさい手をつけなかったのだろうか？だとす

れば、ヴァルアが見込んだだけの事はあるな。ハーレムの本拠地であるレイキャビク星系も、無傷だったし。
「考えてみると、俺たちは、帝国一の金持ちかもな。」
山茶は、笑いながらそうつぶやいていた。

□バルダーク帝国首都惑星アーメルン――
第四軌道ドック宇宙港エリア

ドン！
人のごったえす中で、肩と肩が強くぶつかる。
山茶は、不快感を覚え、自分にぶつかった相手を見定めようと振り向こうとした。
「ナンバーは、ＭＴＤＬ－八〇〇〇だ。カードは、お前の胸ポケットに入れた。俺の専用機だ、壊すなよ。」
そんな彼女の耳元に、そういう声がささやかれた。
「おい！」
すでに後ろを振り向いたときには、目標物は見あたらず、ただ人混みが続いているだけだった。
「どうしたの？」
クンクンッと山茶の裾を引っ張って、少女が山茶を見上げた。
山茶は、胸ポケットから、白いカードを取り出す。
カードについている、液晶ディスプレイには、船の型番と停泊しているポートが記されていた。
『ナンバーは、ＭＴＤＬの八〇〇〇番ね。』

山茶は、クスッと笑うと、自分の足元で首をかしげている少女に視線を移す。
「お前を好きな人がいてな、その人からお前にプレゼントだ。」
山茶は、手に持っていたカードを、少女にみせる。
少女は、その小さな手のひらをいっぱいに広げ、それを受け取ろうとした。
「なくすなよ。」
そう言って、その小さな手のひらに、山茶は白いカードを置いてやった。少女は、キャッキャ、キャッキャと喜びながら、カードをもてあそんでいる。
「今ごろ出てきても遅いんだよ。まったく。」
山茶は、苦笑混じりにそうつぶやいた。
「なに？」
少女が、山茶を見上げる。
「いや。お前がうらやましいなと思ってな。お前には、愛してくれている人がいるんだ。」
山茶は、ニッコリ笑って、そういった。
「あたしも、山茶を愛しているよ。これでおあいこでしょ？」
少女も、ニッコリ笑って、山茶にそういう。
「ありがとうよ。」
山茶は、高笑いをすると、少女を抱き上げた。
二人の笑顔が、高い天上の照明に照らされる。
それから二人は、人混みの中にまぎれていった。
彼女達を、もう見つける事は、できない。

fade out...